vinetur

2026年10月まで、スペインはテキーラの輸出先で世界第2位を維持

2025年の輸入量は7.5%減の710万リットルとなったが、スペインは米国に次ぐテキーラ市場となった

2026年11月15日（日）



メキシコ・テキーラ規制評議会（CRT）のデータによると、輸入の勢いが直近のピークから鈍化するなか、スペインは2025年と2026年10月まで、テキーラの輸出先として世界第2位を維持した。

規制当局によると、スペインの2025年のテキーラ輸入量は710万リットルで、2024年から7.5%減少した。2026年1～10月の輸入量は660万リットルに達し、テキーラの海外市場としてカナダ、英国、ドイツを上回った。輸入量がスペインを上回るのは米国だけだった。

このデータからは、二つの傾向が読み取れる。短期的には、好調な伸びが続いた後、成長が落ち着いている。一方、長期的に見ると、スペインのテキーラ購入量は10年前や今世紀初頭を大きく上回っ

ており、同国は欧州で最大のテキーラ市場となっているほか、米国以外ではメキシコの生産者にとって最も重要な輸出先の一つとなっている。

11月14日（土）にXatakaが引用したCRTのデータは、市場が長期にわたり大きく拡大してきたことを示している。スペインの輸入量は2000年に773,016リットルだったが、2005年には2,014,138リットル、2010年には3,440,321リットル、2015年には3,904,484リットルに増加した。2020年は2,819,095リットルで、その後2025年には7,065,361リットルに達した。パンデミック前の2019年には370万リットルを輸入していた。

長期的な推移を見れば、最近の減少にもかかわらず、スペインが世界ランキングでの地位を保っている理由が分かる。2025年に減少し、2026年10月までのペースも鈍化したものの、輸入量は依然として2019年の約2倍で、2000年代初頭を大きく上回っている。

CRTは、テキーラの原産地呼称を監督する業界団体だ。アガベ栽培農家、蒸留所、瓶詰め業者、流通業者が加盟し、製品がテキーラの地理的原産地の保護に関する法的基準を満たしているかを監視している。同規制当局によると、テキーラを生産できるのは、メキシコのハリスコ州、ミチョアカン州、グアナフアト州、ナヤリット州、タマウリパス州にある181の自治体に限られる。

スペインでの拡大は、輸入量だけにとどまらない。CRTは、スペインの飲食・宿泊市場でテキーラの存在感が高まっていることも指摘している。特に、テキーラをパーティー用の酒や安価なショット以上のものとして紹介するバー、レストラン、ホテルで広がりが見られる。2026年初め、CRTはテキーラ文化の普及に取り組み、取り扱いや提供に関する品質基準を満たしたスペインの29事業者に「Distintivo T」の認定を授与した。同認証は世界で150を少し超える事業者に付与されており、スペインはその中で大きな割合を占める。

このことは、スペインでのテキーラの拡大が、出荷量の増加だけでなく、高級化やカクテル文化の広がりとも結び付いていることを示唆している。主要都市では、カクテル専門バーやメキシコ料理店、アガベスピリッツに特化した店が見つけやすくなっている。また、テキーラを大衆向け輸入酒ではなく、職人的、あるいはプレミアムな製品として位置付けようとするブランドも増えている。

それでも、スペインの蒸留酒市場全体に占めるテキーラの割合は小さい。Espirituosos de Españaの最新年次報告書によると、国内で流通する蒸留酒のうち、テキーラは約0.9%を占める。ウイスキーの22.2%、ジンの16.6%、ラムの15.3%、ブランデーの6.9%、ウォッカの5.2%、アニス系蒸留酒の4.8%を大きく下回る。

この数字は、テキーラが相対的には力強く伸びているものの、スペインの主要な蒸留酒カテゴリーに肩を並べるには至っていないことを示している。一方、この差があるからこそ、テキーラのシェアがわずかに上昇するだけでも、生産者や流通業者にとって意味を持ち得る。総量ではまだ小さな市場でも、消費者がカクテルや高級輸入酒、バーでの高付加価値商品へと移行し続ければ、成長の余地がある。

飲料業界にとってスペインの市場での位置付けが重要なのは、メキシコの輸出業者、スペインの輸入業者、飲食・宿泊事業者にとって、米国以外に注視すべき大きな市場となっているためだ。最近の輸入減速にもかかわらず、バーやレストランでテキーラの認知度が高まり続ければ、酒類流通や業務用販売に携わる企業は、テキーラが既存の輸入酒からシェアを獲得し続ける力を踏まえ、仕入

れ計画やブランド投入、売り場の配分を見直す可能性がある。